

# クメールの魂を 取り戻す道行き

## ソト・クリカー監督SOUL RIVERをめぐって

岡田 知子

### SOUL RIVER あらすじ

2030年のカンボジアの北東部のラタナキリ州。山に狩りに来ていた少数民族クルン人のクラー<sup>1)</sup>は、クメール王朝時代のものと思われる彫像の頭部が埋まっているのをみつけ、売るために持ち帰ろうとする<sup>2)</sup>。それを見ていたクメール人<sup>3)</sup>の警備員のソックは、そこが私有地であることを理由にクラーの行為を厳しく取り締まろうとする。しかしすぐに考え直して町で売りさばいて山分けしよう、とクラーに提案する。住居としている舟で待っていたクラーの妻ラデートは、二人の行動に賛成できないが、ともに舟でメコン川下流の町に行く。町ではあてにしていた買い手が見つからず、ソックの知人で高額で買い取ってくれるという人を探してさらに下流のコンボンチャム州の町を目指す。次第に二人は彫像を売った利益を独り占めしたいと考えるようになり、悪天候の中、舟の上で争う。ソックと彫像は舟から落ちて大海原のようなメコン川に沈む。

### はじめに

メコン川はクメール語で大河とも呼ばれる。ソックたちが目指したコンボンチャム州の州都はカンボジア第三の都市であり、メコン川の主要な港のひとつである。その付近では川幅1キロメートル、深さ50メートルにもなり、大型船の航行も可能となっている<sup>4)</sup>。物語の終盤で舟が沈むところはおそらくこの地点を想定していると思われる。

ロケは実際にクルン人のコミュニティのあるス

- 1) エンディングロールでは「Klang」と表記されているが、英語字幕では「Klark」となっている。語り手の発音は後者に近い。
- 2) 彫像の頭部は、最初クラーが見つけた時は、頭頂部が見えていただけでほかの部分は地中に埋まっている状態だが、次のシーンでは頭部全体が、容易に掘り出された状態にある。2030年におけるこの地域の土壌は気候変動の影響を受けかなり変化していることの一例であろう。
- 3) 2019年の統計で人口1,530万人、クメール語は97.05%が使用しており、カンボジア国内の大部分がクメール人である。〈[https://www.jetro.go.jp/world/asia/kh/basic\\_01.html](https://www.jetro.go.jp/world/asia/kh/basic_01.html)〉なお本稿におけるインターネットリソースはすべて2021年1月9日に最終閲覧した。
- 4) チュット・カイ:225-226。

トゥントラエン州、またアンコール遺跡のあるシエムリアプ州で行われた。キャストはソト・クリカー監督の初の長編作品となった『シアター・プノンペン』(2014)で起用されていた俳優陣である。

ソト・クリカー監督はこの作品について次のように語っている<sup>5)</sup>。

物語のアイディアは、オックスファムやメコン川委員会との集まりで話題に上ったダム建設や気候変動に関する問題から閃いた。さらにカンボジア国内の2つのグループの人々についても描きかけた。つまり先祖代々、何世紀にもわたって同じ場所に住み続ける少数民族の人々と、仕事や金銭のためであれば移動することも厭わないクメール人である。少数民族の人々にとってのメコン川とは、クメール人が受け継いできたアンコールワットに匹敵するものなのである。カンボジアにはクメール人も少数民族の人々もいて、遺跡やさま

5) 〈<https://www.nationalgallery.sg/blog/painting-with-light-dialogue-directors-mekong-2030>〉

ざまな自然とともに何世紀も共生してきた。アンコールワット同様、メコン川やトンレサップ湖を保護していくことは非常に大切なのだ。

本稿では物語の要となっている少数民族クルン人を紹介し、作品のタイトルの意味について考察する。また物語が因果応報を示すわかりやすいストーリーであると同時に、クメール人が魂を取り戻す物語としても読めることを検討する。

## 1. 自然と共同体の崩壊した 2030年のカンボジア

### 1-1. 森とともに生きてきた少数民族クルン人

少数民族クルン人<sup>6)</sup>は、カンボジア北東部のラタナキリ州、ストウントラエン州、モンドルキリ州に住む。ラタナキリ州とモンドルキリ州には、国内天然林の約4割が存在し、メコン川の支流である川が複数流れている<sup>7)</sup>。カンボジアの少数民族人口の大部分がこれらの支流河川流域に集中し、これらの自然資源を利用した生活を送ってきた<sup>8)</sup>。

親族集団を中心とした共同体での生活を大切にす  
るクルン人は、定住地である集落と世帯ごとの畑、森を生活圏とし、それ以外の町や都市部は共同体原理の外側として明確に区別されている<sup>9)</sup>。また森羅万象に宿る精霊への信仰を大切にしている。例えば重病人があると、水牛を屠って精霊に捧げ、儀式を行い、料理を囲んで宴会が催されていた<sup>10)</sup>。

### 1-2. 虹色の輝きを失ったトラエン

メコン川の水量の加減を体の色の変化で教えてく  
れていたトラエンは、物語の中では、クルン人を守る精霊の宿る生き物の象徴となっている。トラエンはトカゲの一種である。トラエンと共存してきた地域住民にとっては身近な存在であっても、それ以外の人々にとっては「新種」の「発見」となる。2012年、ラ

タナキリ州で「尻尾は胴体よりもはるかに長く、四肢は極端に短く、光を屈折するうろこで覆われた体は太陽の光が当たると虹色に輝いて見える」新種のトカゲが発見されている<sup>11)</sup>。世界自然保護基金(WWF)の報告によると、メコン川流域では過去20年間で2500種近い「新種」が「発見」されており、2015年だけでも「虹色スネーク」など163種の新種の生物が判明している<sup>12)</sup>。

クラーは幼い頃から、トラエンの尻尾の色の変化を見て川の水量の増減を判断することができた。だが自然災害の予測はできても、ダム建設の影響による人災については予測できなかった。2021年には洪水のために村人や動物が命を失い、遺体は遺族の手に戻ることなくメコンの下流まで流されていった。2028年の洪水では、ついに村は壊滅状態となり、先祖代々の土地を去ることを余儀なくされる。

環境の変化を前にして精霊はクルン人を守り切れず、またクルン人も精霊への信仰から離れていく。精霊の宿る動植物や集落の事物はなくなり、クルン人もクメール人の帰依する仏教を信仰するようになっていったのだろう。その証拠にラデートは、夫クラーが金銭的価値のあるとみなす彫像の頭部を手に入れたことに対して、そのこと自体が「業である」と仏教用語を使うのである。

### 1-3. 天空からメコン川下流に移る「花婿の家」

物語では、クラーは川に小さな屋形舟のようなものを浮かべて暮らすようになっている。筏の上の丸屋根の小屋は、クルン人が「花婿の家」と呼んでいるもので、実際には3~4メートルの高さの柱の上にあるものである。結婚適齢期の男性が未婚女性たちに自らの勇敢さを示すために住むことが伝統とされてきた<sup>13)</sup>。

かつては天空に浮かぶような小屋で住むことで度胸を誇示していたクルン人の男性たちは、土地を失い、柱は撤去せざるをえなくなり、小屋の部分を筏に乗せた。彼らの胆力の指標は高さではなく、メコン川下流への移動距離となったかのようだ。クラーと妻ラデートが暮らす舟の近くには、同様の舟が数艘し

6) 本作品の冒頭のシーンのロケ地を彷彿とさせる、クルンに伝わる民話として「長老クロンヨンの洞窟とストーンフィールド」がある。(<[https://nyonyum.net/ja/webmag/nn93-special\\_4/](https://nyonyum.net/ja/webmag/nn93-special_4/)>)

7) (<<http://www.mekongwatch.org/report/tb/3sDam.html>>)

8) 同上。

9) 井上 pp. 2-3。

10) (<[https://krorma.com/magazine/fl\\_37\\_khmerleu/5/](https://krorma.com/magazine/fl_37_khmerleu/5/)>)

11) (<<https://www.afpbb.com/articles/-/2859951>>)

12) (<<https://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/news/16/122100492/>>)

13) (<[http://www.mekongwatch.org/PDF/MekongYear\\_1.pdf](http://www.mekongwatch.org/PDF/MekongYear_1.pdf)>)

がなく、人影はない。生きる術を失ったクルン人たちは集落を去ってメコン川下流を目指し、クメール人と共生していくようになる。

クラーよりも先に下流に行ったクルン人たちは、電灯の灯った高床式の家に住むようになっている。しかし、その家は、地域に自生する竹から手造りした花籠のような伝統的な家屋ではなく、高価なトタン板の壁で囲われている。ただ、クルン人の男性たちは相変わらず、狩猟用の道具の手入れをしており、舟着き場はまだ整備されておらず、岸に上がるには泥の中に足を這わせなければならない。

クラーの希望は自分の土地を購入し、農作物や家畜を育てることである。ラデートもかつての集落に戻って同じクルン人の共同体で暮らすことを望んでいる。ラデートは「国家の発展の証」とソックが表現する電気を使用している同胞の姿を見て、そこに定住することの可能性をクラーに尋ねる。しかしクラーは不可能だと即答する。クルン人は精霊信仰やそれにまつわる儀式と宴会を通して築いてきた共同体だからこそ、その一員であることができたのだ。単に同じ民族だからという理由だけでは新しい土地でのクルン人の共同体に入ることはできないのであろう。

## 2. クルン人とクメール人の隔たりとその発端

クルン人の共同体原理の内外の境界はあいまいになり、クメール人との婚姻関係もすすんでいったと考えられる。クルン人独自の言語も消滅したのかもしれない。同じクルン人の夫婦であるクラーとラデートですらクメール語で話している<sup>14)</sup>。

しかしクルン人とクメール人の隔たりは大きい。クラーやラデートはソックを指してクメール人たちは信用できない、詐欺師であると言う。同じようにソックもクラーたちのことを信頼していない。鉈を持った手を挙げるクラーに対して、ソックは近代技術の象徴と見えるトランシーバーを振りかざす。国の発展のためにうまく自然資源を共同で利用しなければならないのに、野蛮人、愚か者たちが自然資源を乱獲している、とクラーたちに対して居丈高に語る。クラーには森が象徴する先祖代々の土地、換金可能

14) 実際には俳優の日常の言葉であろうプノンベン方言で話している。

な品物としてのクメールの彫像が見えるが、国家発展の指標とされる水力発電、道路、高層ビルは見えない。一方、ソックにはクラーが言う森は見えず、見えるのは私有化された土地のみである。警備員として日々、土地を見回っていたにも関わらず、クメールの彫像にも気づかなかった。クラーたちの暮らす筏の上の小屋の中をおそらく初めて見渡し、何もない様子に驚く。

ソックが目指すところもクラーやラデートとは正反対である。クラーたちが先祖代々の土地に、共同体に戻りたいという一方で、ソックはどこでもいから遠方に行くことを希望している。

この隔たりが広がった発端がクルン人とクメール人にあったわけではないことが、クラーとソックの序盤の言い争いからわかる。クラーの主張は、生活の糧がなくなったのは自分たちの森や土地がなくなったから、そういう状況が作り出されたのは上流に建設されたダム<sup>15)</sup>のせいである。ソックはそのダムを建設したのは自分ではないと反発する。カンボジア国内の2つの構成民族、つまり少数民族を象徴するクルン人と主要民族であるクメール人によるものではないのであれば、それは国外の誰かであることをここで示唆している。

## 3. 語り手の示す SOUL RIVER

物語はクルン人の登場によって始まり、最後は筏の上にクルン人の伝統的な小屋とクルン人夫婦だけが残される。ソックは悪行の結果、メコン川に沈む。物語の語り手<sup>16)</sup>は、直接的な表現で、すべてを余すところなく説明しようとする。視聴者に対して自由な解釈を委ねることなく、因果応報を前面に出した非常に啓蒙的な物語となっている。事実、クリカー監督は、作品に出演した僧侶の1人が地域の指導的役割を持った人物であり、この作品をその地域で上映したことで、地域住民がプラスチック製品の使い方や環境問題について関心を持つようになった、と話している<sup>17)</sup>。

15) 物語中では「ブルー・ダム(火のダム)」とされており、実在の名称ではない。

16) おそらくクリカー監督自身がナレーターである。

17) <<https://www.nationalgallery.sg/blog/painting-with-light-dialogue-directors-mekong-2030>>

タイトルのSOUL RIVERとはもちろんメコン川を指している。そして最後に「私たちは森林を愛し、守っていかねばならない。アンコール遺跡を愛し、守っていくのと同じように」とのナレーションにあるように、メコン川はアンコール遺跡に例えられている。冒頭でSOUL RIVERという題字が提示された直後にクラーがみつけた彫像の顔の部分が大写しになることから、それは明白である。

#### 4. もうひとつのSOUL RIVER ——クメール人ソックの魂を呼び戻す道行き

上記以外に筆者が注目したのは、物語のスタートに響く銅鑼の音、ソックがメコン川を下る途中で托鉢する僧侶に対して行った功德、SOULにあたるクメール語の「魂」の3点である。これらの点は何を示そうとしているのだろうか。

##### 4-1. 銅鑼の音

物語は、映像が始まると同時に、ひとつの銅鑼が一度叩かれ、その音の響きが後に残っていく。クメール人ソックの物語の始まりの合図となっているのである。

銅鑼はクルン人もクメール人も使用する楽器である。クルン人を含むカンボジア北東部の少数民族はこの銅鑼を葬儀などの大きな儀式で使用する事が多い。手で持つのではなく、並べてぶら下げた状態の複数の同じ大きさの4つの銅鑼を、4人の奏者がひとつずつ担当して合奏する<sup>18)</sup>。

一方、クメール人は、ひとつの銅鑼とひとつの大太鼓を交互に叩く。こちらが葬儀やそれに関連する儀式で使うことが多い<sup>19)</sup>。遠くからかすかに聞こえるとき、特に人里離れた夜間に聞くと、悲しく切ない気持ちになり、誰かが亡くなったのだとわかる、とされる<sup>20)</sup>。

18) Commission des Moeurs et Coutumes du Cambodge, p.10

また実際の演奏風景は下記のとおりである。ラタナキリ州で撮影されたもの。精霊に対して豊穰の祈りと儀式を捧げるときの音楽。儀式ではその進行に従って5つの銅鑼が3つの曲を奏でる。ここでは5人の奏者によって演奏されている。

Les Cartes Postales Sonores, <[https://www.youtube.com/watch?v=5BnpVsdpios&feature=emb\\_logo](https://www.youtube.com/watch?v=5BnpVsdpios&feature=emb_logo)>

19) 婚礼の儀式の中の花婿の行列でも銅鑼は使用される。この場合には先頭に行く複数名がひとつずつ銅鑼を下げており、速い拍子で華やかに叩く。<[https://www.youtube.com/watch?v=cLlkigFNZGM&feature=emb\\_logo](https://www.youtube.com/watch?v=cLlkigFNZGM&feature=emb_logo)>

20) 同上。p.7 下記は実際の演奏風景。➤

物語の中で聞こえる銅鑼の音は、常に同じ使い方、ひとつの銅鑼が一度叩かれるだけである。これは、クルン人よりもクメール人の銅鑼の使い方に近い。観客に不安を抱かせるような音であり、合計4回流れる。物語の始まり、クラーの生い立ち、ソックが警備員になったいきさつ、2021年に洪水で死者が出た、という語りの前にそれぞれ挿入される。不穏な雰囲気醸し出す理由が示されるのである。それがクライマックスに達したとき、ソックは大海原のようなメコン川にいるのである。

##### 4-2. ソックの功德

ソックの欲望は、メコン川を下るにつれて、500、5,000、8,000<sup>21)</sup>と彫像の売却希望価格で示されるかのように膨らんでいく。その一方で道中ではメコン川に沿って、クメール人の信仰する上座仏教で大切にされる三宝、つまり仏法僧が提示される。買い取人がいるとソックが主張した場所の舟着き場には寺院が建っており、そこには僧侶の姿が見え、読経の声が聞こえている。下流の大都市コンボンチャムを目指す途中で、ソックたちの乗った舟は、上流に向かう舟に乗った托鉢の僧侶たちに会う<sup>22)</sup>。ソックは自ら舟を近づけて僅かながらの現金を鉢に入れる。ソックは善行を積んだのである。

##### 4-3. クメールの魂

クメール人は「魂」に対して伝統的な考え方を持っている。それは、ひとはそれぞれ大小あわせて19個の魂を持っており、それらのうちのいくつかでも体から抜けてしまうと、病に罹ったと解釈される。その際には「魂を呼び戻す儀式」を行う<sup>23)</sup>。

ソックはもともと漁師だったが、2020年に魚が

The funeral kantoam ming orchestra of Wat Svay <[https://www.youtube.com/watch?v=nRyz7aoDNbA&feature=emb\\_logo](https://www.youtube.com/watch?v=nRyz7aoDNbA&feature=emb_logo)>

21) 通貨単位は米ドルである。カンボジア国内では1990年代初頭から米ドルが通貨として流通している。

22) メコン川の水位を考慮すると設定は雨季と考えられるが、僧侶の托鉢は雨安居には行われなければならないので、2030年には気候変動のために現在の状況はあてはまらないのかもしれない。

23) Khing Hoc Dy p.6. 下記は実際の儀式の様子を撮影した動画である。<[https://www.youtube.com/watch?v=cDcYJCVsmYg&feature=emb\\_logo](https://www.youtube.com/watch?v=cDcYJCVsmYg&feature=emb_logo)> <[https://www.youtube.com/watch?v=XHPZNYEa491&feature=emb\\_logo](https://www.youtube.com/watch?v=XHPZNYEa491&feature=emb_logo)>

獲れなくなって以来、私有地の警備員になった<sup>24)</sup>。「ソック」という名前は、カンボジア男性の一般的な名前前で、「安泰」や「幸せ」を意味する。だが物語の中のソックは安泰や幸せからは程遠いようである。ソックが声高にクラーたちに語って聞かせる「国家の繁栄」を彼自身が享受できているようには見えず、クメール文明の遺産を売り渡してでも、ここではなくどこか遠いところに行って住むことを熱望している。

このようにソックが心安らかに平穏に生きられないと感じるのは、ソックの魂が彼の体から抜けてしまっており、それがクメールの地にはないからかもしれない。泳ぐこともできず、舟も持たないソックは、本来ならひとりでは踏み出せなかったはずだが、彫像に誘われるようにしてメコン川を下ることになる。それは自らの魂を探し、呼び戻す道行きとなった。

さらに言うのなら、彷徨っていたクメールの魂がクメール人の手によってあるべき場所に戻される物語とも読める。アンコール遺跡はクメール語で「クメールの魂」と表現されることが多い<sup>25)</sup>。クメールの彫像の頭部は、クルン人の先祖代々の土地、いわば本来あるべき場所ではないところにあり、クルン人によって「発見」された。それはクルン人の主導でクメール人とともにメコン川の主流へと運ばれていく。ソックは最後のシーンで彫像の顔をみつめ、クメール人のアイデンティティであるクロマーと呼ばれる格子柄の万能布<sup>26)</sup>で丁寧に包みながらこう独白する。「800年前、クメール文明はビルマ、ラオス、タイにまで広がっていたのだ」。そして彫像を独占しようとしたことで、はからずも自らの命を懸けてクメールの遺産が不法に人の手に渡ることから守ることになる。クメールの魂はあるべき場所に戻った。それはかつてクメール文明が繁栄していた広大な地域に、現在でも豊かな恵みをもたらすメコン川という場所である。

24) クリカー監督のインタビューでは、ソックは漁師をやめた後、メコン川上流に位置する土地に移動して農民となり、その後警備員となった、としているが、作品内では農民であったことは明らかにされていない。〈<https://www.nationalgallery.sg/blog/painting-with-light-dialogue-directors-mekong-2030>〉

25) 〈<https://kohsantepheapdaily.com.kh/article/128407.html>〉  
〈<https://www.rfi.fr/km/cambodia/improper-practice-at-ancient-temple-17-07-2017>〉

26) 2018年に1,149.8mのクロマーがギネス世界記録に認定された。

## おわりに

本作品はシンプルなストーリー展開になっているからこそ、視聴者を選ばない。作品中で使用される言語や字幕が理解できなかったとしても内容を把握することができる。また現時点から10年後と想定されたカンボジアを舞台としているが、それと明確にわかる演出は多くない。この物語は、まさに現在のカンボジアの状況を映し出しているのであり、それは、今、行動を始めれば、環境破壊や共同体の崩壊を少しでも緩和できるという希望を示唆している。

## 参考文献

井上航 2016 『霊への働きかけと勢い——カンボジアのクルンにみる身体の動きと気分』富士ゼロックス株式会社小林節太郎記念基金。

チュット・カイ 2014 『追憶のカンボジア』岡田知子訳、東京外国語大学出版会。

Comission des Moeurs et Contumes du Cambodge. 1969 *Lomnoam Phleng Khmer: Aperçu sur la musique trationnelee khmère*, L'Institut Bouddhique, Phnom Penh. (クメール語)

Khing Hoc Dy. 2004. *Noutes sur la cérémonie de l'appel des esprits vitaux*. Librairie ANGKOR, Phnom Penh. (クメール語)